

富山市岩瀬古志町のシロバナハマヒルガオ

著者	長井 真隆
雑誌名	富山市科学文化センター研究報告
号	5
ページ	1-6
発行年	1983-03-20
URL	http://repo.tsm.toyama.toyama.jp/?action=repository_uri&item_id=483

富山市岩瀬古志町のシロバナハマヒルガオ*

長井 真隆

富山市科学文化センター

A community of *Calystegia soldanella* (LINN.) ROEMER et
SCHULTES form. *albiflora* (MAKINO) HARA found at
Iwase-koshimachi, Toyama City, Central Japan

Shinryu NAGAI

Toyama Science Museum

So-called "Shirobana hamahirugao," *Calystegia soldanella* (LINN.) ROEMER et SCHULTES form. *albiflora* (MAKINO) HARA has pure white corollas. This is a white forma of so-called "Hamahirugao," *Calystegia soldanella* which has yellowish-green stems and petioles. The distribution of the present forma is limited to several places along the Sea of Japan, and the number of plant of each locality is very few. The distribution in Toyama Prefecture is Iwase-koshimachi, Toyama City and Ikuji, Kurobe City, and the former forms a community. This community was, however, partly destroyed by the preparation work to make a bath beach in 1981. But I had surveyed on this community in 1980, I would like to report the condition around it in this report.

Well, there is a picture of this plant drawn by Mr. Untei SEKINE, who had been ordered to draw by 10th Lord of Toyama Fernald Clan, Mr. Toshiyasu MAEDA. This picture is considered to be the oldest literature on this forma in Japan, and is told to have been drawn on the plant collected in Toyama.

1. The community consists of 4 patches and its area is about 137.6m².
2. The community is located within the Association, *Calystegio soldanellae-Salsolietum komarovii* OHBA, MIYAWAKI et TX. The habitat segregation between two formae was not recognized.
3. Flower of this plant is about 4mm in diameter, which is 1cm shorter than the "Hamahirugao," but those from Kanazawa City and from Kurobe City are equal to the "Hamahirugao."
4. The picture of this forma drawn by Mr. U. SEKINE seems to have been drawn on the plant of Iwase-koshimachi or its neighbouring.
5. In order to preserve this forma in this area, the environment around the community should be protected as it was, and the preparation work for making a bath beach should be avoid this community.

* 富山市科学文化センター研究業績第24号

シロバナハマヒルガオは、花冠が純白で、茎および葉柄が黄緑色の、いわゆるハマヒルガオの白花品である。

石川県（市川 1944）、京都府（牧野 1946）、鳥取県（山口 1972）、富山県（長井 1975）、そのほか秋田、新潟県など日本海沿岸の限られたところに分布し、しかも、その量は少ない。富山県では、富山市岩瀬古志町と黒部市生地に見られるが、岩瀬古志町のは群落をなしている。この群落は、大小4個でいずれも岩瀬浜海水浴場内にあり、これが1981年、海水浴場整備作業で、1部が攪乱された。幸い1980年に現地の概況調査を行っていたので、当時の状態をある程度記録にとどめることができた。不十分ではあるがここに報告する。

また、十代富山藩主前田利保の命で写生した関根雲停のシロバナハマヒルガオの図は、わが国最古の文献と考えられるが、これが富山産のものを描いたと考えられているので、この点についてもふれることにする。

調査地域と調査方法

調査地域は、富山市岩瀬古志町の岩瀬浜海水浴場で、南は海岸道路から北は汀線まで、東は監視所から西は監視詰所までの範囲である（図1）。

調査方法は、シロバナハマヒルガオの群落と、その周辺群落の被度と群度を測定した。被度および群度は、Penound-Howard法と沼田真法を用い、1 m²の方形区をとった。また、花の色や大きさ、茎や葉柄の色、その他着花率も併せて観察した。株数については、砂中に埋まっているので、数えることはできず、地表にでている茎の数を数えるにとどめた。調査は、1980年6月10日と14日に実施した。前田利保との関係については、関係機関にあたっているが十分な資料は得られていない。

調査結果および考察

1. 生育地点と植生

AからDの4群を確認した（図1・2、表1、図版1～4）。A地点は監視詰所より東へ6 m、海岸道路より海側へ7 mのところにあ

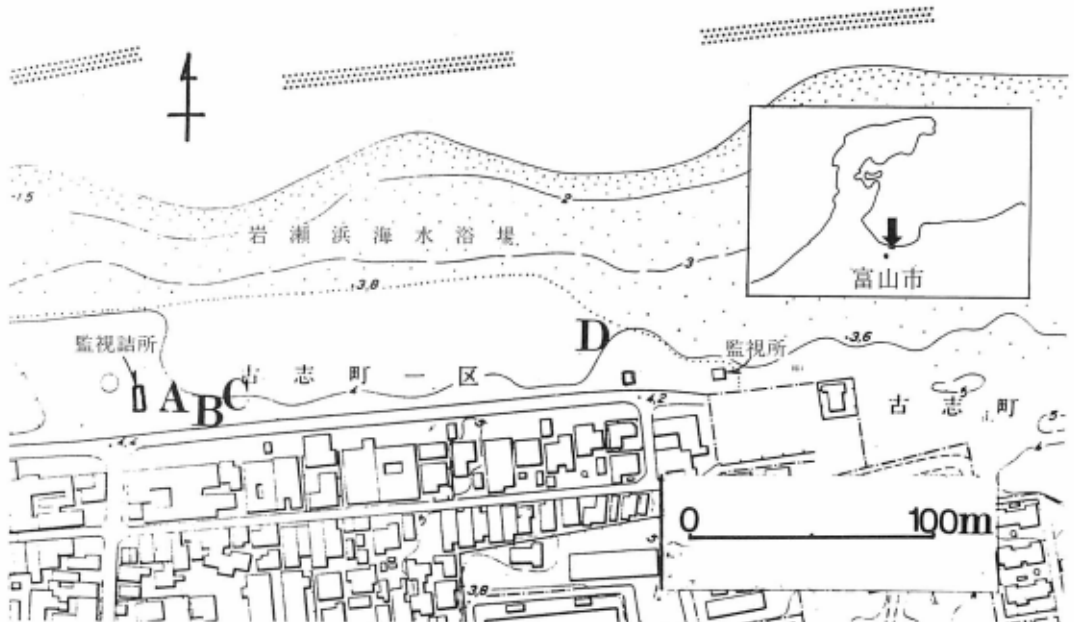


図1 シロバナハマヒルガオの生育地

富山市岩瀬古志町のシロバナハマヒルガオ

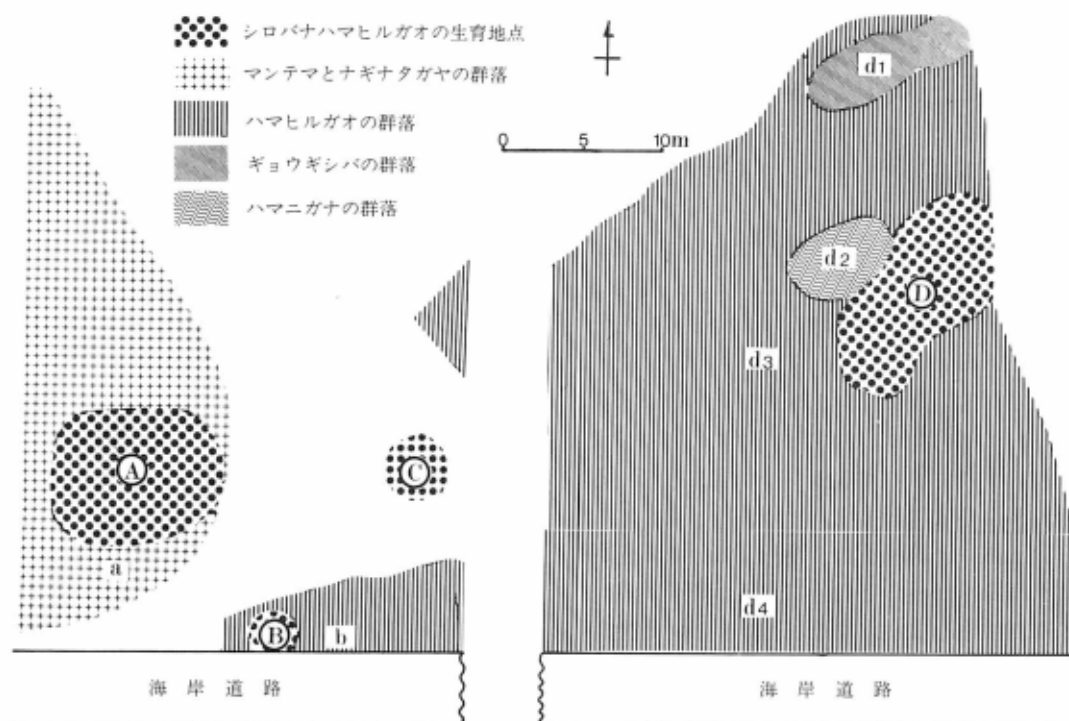


図2 生育地点の植生

表1 植生調査表

調査面積 1 m²

地 点	A	B	C	D	a	b	d-1	d-2	d-3	d-4
面 積(m ²)	63	1.6	3	70	—	—	—	—	—	—
シロバナハマヒルガオの 地表に出ている茎の数	167	18	125	178	—	—	—	—	—	—
シロバナハマヒルガオ	2.3	+	2.2	3.3						
ハマヒルガオ	1.1	3.3	1.1	1.2		3.3	1.1		4.4	4.4
ギョウギシバ	2.3		2.2	+			4.4	1.1		+
ナギナタガヤ	1.1	2.2	2.2		2.2	1.1				+
コマツヨイグサ	+		+	+	+	+			1.1	
マンテマ		1.1	1.1		3.2	1.1				+
カラスムギ		+	+			+				2.2
カモジグサ			1.1		+					+
オナモミ				+			1.1	1.1		
マメグンバイナズナ							+			1.1
ハマニガナ								3.3		
ケカモノハシ									+	+
ウンラン									+	+
ハマボウフウ										+
ヨモギ										+
メマツヨイグサ										+
オランダミミナグサ										+

る。面積約63㎡、地表に出ている茎の数は167本、生育は良好である。また、砂地の固形度が比較的高く、ギョウギシバの混入が見られる。周辺部は、マンテマ、ナギナタガヤの群落である。

B地点は、海岸道路に接した面積約1.6㎡の小さな群で、地表に出ている茎の数もわずかに18本である。ハマヒルガオが優占した群落である。

C地点は、A地点より東へ10mのところにある、面積約3㎡、ハマヒルガオ、ギョウギシバ、ナギナタガヤなどが多数混生している。周辺部は砂地に囲まれている。

D地点は、監視所より西へ10m、海岸道路より海側へ16mのところにある。面積約70㎡で4群中最も広い。また、他の植物の混生が少なく典型的な群落である。周辺部はd-1、d-2を除いて安定したハマヒルガオの群落からなっている。

AからDの生育地は、マンテマ、ナギナタガヤ、ギョウギシバなどの荒廃地性のものが見られるが、一般的にはハマヒルガオ・オカヒジキ群集に該当する。マンテマ、ナギナタガヤ、ギョウギシバなどが見られるのは、近くに人家があり、そのため風速が落ちたり、あるいは、踏みつけなどの人為的影響を受けているためと考えられる。また、オカヒジキをほとんど欠いているのは、砂浜が狭いことのほかに、波浪や踏みつけによるものと考えられる。

シロバナハマヒルガオとハマヒルガオは程度の差はあるが、どの地点においても混生しており、特に住みわけは認められない。

2. ハマヒルガオとの相違点

ハマヒルガオの花冠は、淡紅色であるのに対して、シロバナハマヒルガオは純白色である。また、茎や葉柄は紅紫色であるのに対して黄緑色である。形や大きさについては違いが認められない。分枝のつぼみ、花、果実の着きぐあいもほとんど同じで、着花率がそれぞれ73.7%、73.6%であった(表2)。

花冠の長さは、ハマヒルガオもシロバナハマヒルガオも共に約4cm(3.8~4.3cm)である。これに対して花径はハマヒルガオが約5cm(4.3~5.8cm)、シロバナハマヒルガオが約4cm(3.8~4.3cm)で、シロバナハマヒルガオの方がやや短い。いずれも20検体で測定した。市川(1949)の測定したものは、花冠の長4cm、花茎5cmでハマヒルガオの大きさと等しい。また、黒部市生地のもは、花は1個だけ咲いていたが、市川の測定値と等しかった(1982, 6, 5)。

前田利保とシロバナハマヒルガオ

黒部市生地のシロバナハマヒルガオは、県指定史跡、生地台場に1株ある。昭和の初めころ(1930年代)、その近くの越湖浜に1㎡ほどの一群があった。このことは、高倉盛信(黒

表2 分枝の着花状況(つぼみ・果実を含む)

調査面積 1㎡

植物名	着花数 地点	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	計	着花率 (%)
ハマヒルガオ	B	9	5	3	3	4	2	2	2	3	1	0	0	34	73.7
	D	11	2	4	4	1	2	5	3	4	3	2	1	42	
シロバナハマヒルガオ	A	11	6	3	1	2	5	2	4	4	2	1	1	42	73.6
	D	8	4	5	2	3	2	4	0	1	1	0	0	30	

部市生地)によって確認されている。松林の比較的光の差す開放地であったが、1955年のころには松林が茂り、2・3株に減少したという。1961年、工場建設に伴い、その年の6月、高倉盛信が自宅に移し、今日まで鉢で栽培し保護している。このことが1973年6月3日、新聞で報道され、これが契機となって富山市岩瀬古志町の自生が、金子玲子(富山市下新町)によって明るみにでた。

以上が富山県内におけるシロバナハマヒルガオの最近の経緯であるが、これより、ずっと以前に、徳川時代末期に十代富山藩主前田利保(1800~1859)が、関根雲停に写生させた図があるが、実はこれが富山産のものらしい(牧野1946)。

牧野富太郎は、その報文の中で次のように記述している。「この白花ハマヒルガオは、固よりめったに出会いませんが、ずっと以前に私は、丹後久美浜付近の海浜砂丘で見受け、

これを採集したことがあります。また、徳川末期時代に関根雲停とよぶ有名な畫工が越中富山の前田利保侯の命で写生した図があります。この図には産地が書き入れてはありませんが、これは多分越中での品を描いたものではなかろうかと想像せられます。今ここにこの雲停の図の一部を抄写して掲げて見ましょう(図3)。原図は実物大で着色してあります。上は白花ハマヒルガオが既に在ったことの証明です。」

前田利保は、窮迫した富山藩を建て直すために、殖産興業に力点を掛け、陶器、塗物、機業、売薬、薬草栽培を振興させたことや、利保自身本草学者であったことは、よく知られているところである(奥田、米原 1978)。ところで、雲停のシロバナハマヒルガオの図は、富山産の可能性は大きいのではないかと考えられる。シロバナハマヒルガオは、秋田市(山口 1972)、新潟県岩船郡岩船(富



図3 関根雲停写生のシロバナハマヒルガオ
(原図着色・縮小、採集と飼育1946より)

檜 1938), 富山県黒部市越湖 (高倉 1930年代), 黒部市生地 (長井 1982), 富山市岩瀬古志町 (金子 1973), 金沢市大野町 (市川 1941), 京都府久美浜 (牧野 1946), 金沢市栗崎, 京都府舞鶴, 鳥取県岩美郡浦富および県東部, 中部 (山口 1972) など, 日本海沿岸に分布している。千葉県長生郡東浪見産のもの (富樫 1938) を国立科学博物館で見たが, 純粋な白花品ではないように見受けた。前田利保は, 江戸においても本草学の研究を行っていたが, 関東方面から入手したとは考えられない。次に, 富山市岩瀬古志町は, 藩の中心よりわずかに 8 km 地点にあり, また, それが当時栄えた富山港に隣接しており, 他の日本海沿岸産地よりもはるかに近く, 発見や入手は容易であったと考えられる。

他の産地から採集し, これを栽培して写生したとも考えられるが, 自藩の振興策としてまず自藩のものに着目するのが, なりゆきではなかろうか。したがって写生に使った材料は岩瀬古志町方面のものと考えるのが妥当であろう。なお, 雲停の写生原画の所在については, 関係方面に照会している。

ま と め

1. 富山市岩瀬古志町の海水浴場に生育しているシロバナハマヒルガオは, 大小 4 群で生育総面積は, 約 137.6 m² ある。
2. ハマヒルガオ—オカヒジキ群集に該当する。ハマヒルガオとの住みわけは認められない。
3. 花径は約 4 cm で, ハマヒルガオの 5 cm より 1 cm 短い。金沢市, 黒部市のものは, ハマヒルガオと等しい。
4. 前田利保 (1800~1859) の命で描いた関根雲停のシロバナハマヒルガオは, 岩瀬古志町方面のものではないかと考える。

お わ り に

シロバナハマヒルガオは, 純白で非常に美しく, 日本海沿岸の限られたところに分布する貴重品種である。花期は 6 月のころで, 海水浴シーズンには花が終わっている。地下茎が発達しているため, 踏みつけに強く, 海水浴シーズンを乗り切って, 今日なお旺盛に生育している。

保護対策として, 従来どおりの環境下におけるのが最も妥当であると考ええる。海岸整備事業等を行う場合は現地をさけてほしい。やむを得ない場合は一部を残し, 他は近くのハマヒルガオ群落に移して保護することが望まれる。

この報告をまとめるにあたり, 東京大学山崎敬先生, 金沢大学里見信生先生からは, 文献やご教示をいただいた。また, 国立科学博物館金井弘夫先生には標本を, 県立図書館広瀬誠先生には, 本草通串証図を見せていただいた。新潟県岩船と千葉県東浪見で採集なさった山梨県忍野村の富堅誠先生からは, 当時の情報を直接得た。富山市科学文化センター布村昇学芸員にはまとめの協力を得た。厚く御礼申し上げる。

参 考 文 献

- 市川昌徳, 1944, 白花ハマヒルガオの発見及び観察, 採集と飼育, Vol. 6 No. 9
- 大田弘外, 1979, 第 2 回自然環境保全基礎調査, 植生報告書, 富山県
- 奥田淳爾外, 1978, 越中の人物, 巧玄舎
- 長井真隆, 1975, 富山県の白花ハマヒルガオ植物と自然, Vol. 9 No. 1
- 原 寛, 1948, 日本種子植物集覧第 1 冊
- 牧野富太郎, 1946, 白花ハマヒルガオとノカンゾウ, ヤブカンゾウ, 採集と飼育, Vol. 8 No. 8 ~ 9
- 山口博通, 1972, 浦富海岸で白色ハマヒルガオを発見, 植物と自然, Vol. 6 No. 8

- 図版 I
- 1 : シロバナハマヒルガオ
 - 2 : A地点のシロバナハマヒルガオの群落
(建物は監視詰所)
 - 3 : D地点から見たハマヒルガオの群落
(後方の家並は海岸道路に面している)
 - 4 : D地点のシロバナハマヒルガオの群落



1



2



3



4